

会議議事録

事業名	令和6年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」事業 (2)教職員の資質能力向上の推進① 効果的な教育成果の公開方法等に関する支援体制づくりの推進
代表校	一般社団法人全国専門学校教育研究会

会議名	第5回専門学校教員概論研修プログラム開発委員会
開催日時	令和7年2月7日(金) 15:30~17:30
場所	リファレンス駅東ビル貸会議室
出席者	委員対面：植上 一希、佐藤 昭宏、丹田 桂太、松田 義弘、 小田 茜 計5名 請負業者：飯塚 正成 計1名 合計6名
議題等	OKBC 学園検証報告 ・私は結構2時間使ってじっくりやれたので良かったが、一方で丹田さんは40分という時間で 1,2限の大事なポイントを押さえてやるのは結構大変だったかなと思っている。研究者ミーティングでもすでに話しているが、テキストの基本的な構成としては特に問題はないと感じている。実証講座の時間を設定が大変だった印象。もう一つは当日参加いただいた委員の先生だったからご意見があったが、キャリアオーナーシップを持つことが大事である。専門学校の先生方にとって大切だということで、そこをぜひテキストでもうまく反映していけたらいいと思う。加えて、実際に沖縄の辞書講座をして新たに得られた知見が、専門学校の教育を受けた経験がないという先生の中でそもそも高校を卒業してそのままという方もいらっしやった。そこまで想定ができていなかったの、テキストを書くときに少し意識しながら書きたいと個人的な感想として思った。(小田) 〈意見・感想〉 ・大変いいものができそうな感じがしている。私が知っている人に話を少し聞いてみた。そこで、丹田くんがやったところから小田さんがやったところに対してのセパレートされているように感じる。やはり、ワークは楽しい。だから、ワークについてはすごくいいが、分野が違うところがまとまっていたため、公務員とITが一緒にいるとまとめてつかないところがあった。ただ、皆さん1次会でお帰りになっ

	た後に、2 次会で成底さんとこのような教育というか教育生については、今後必要になるので、ぜひぜひいいものを作っていただきたい。 (飯塚) →ありがとうございます。研究者ミーティングでもいろいろと振り返りの議論をさせていただきましたが、基本的には今回この事業自体ではテキストを作るということが一番の目的で、その一つ実証として検証していくという考えになっている。今回の反省点などを頭に入れながら今年と来年度のテキストの改正に向けてやっていく。一方でこのような研修も需要が間違いなくあると思う。今後 TC 財団とか新入教員研修の改革なども、できればしていきたいなと思っている。そのようなところに、大体案がありますよということ入れていくためにも、来年度もこの研修の改善に努めていければなと思う。時間の目が特に大きかったと思うので、その辺を次回以降努めたい。松田先生、参加されていないと思うが、もし質問やコメントなどがあればぜひお願いします。(植上) →受講された先生方はどの分野の先生で?(松田) →公務員、IT、ホテル。(丹田) →あと、ペット系(小田) →ホテルの方が本当は二名いらっしゃったが、一人になった。(丹田) →講義時間の長さが出ているが、これはあまり気にしないでいい。どのような分野と人がというのは、実技系の人は長く時間で講義を受けることに対して慣れていない。自分たちも実習しかやってないから。だから、あんまり気にされなくていいと思う。(松田) →先生にそう言っていただけると。ありがとうございます。今後この講座についてはまた来年度、改善を図っていく。そして、来年度はテキストを前もって作り込んで、できればテキストを予習しておいてねという形でこのような研修ができるといい。時間不足をある程度解消できると思う。少しそのような作り込みが必要なこともわかったことが、大きなポイントだと思う。この辺りをまた研修の設計の時も、時間のところなどを相手方と詰めながらやっていくことも、今回の大きな獲得ポイントだと思う。この辺りを来年度の課題として確認しておきたい。この講座実施報告書については、丹田さんに基本的に取りまとめをお願いしている。今回は第 2 回の KBC だが、第 1 回もすでに作っていただいている。この YIC と KBC の振り返りと実証講座の形、参加者などを含めたものを 1 枚か 2 枚くらい 初めにつけてもらって、この振り返りのアンケート・考察・パワーポイント。KBC で作ったパワーポイントでいいので。(植上) →あっちの方でいいの?(丹田)
--	--

	→KBC でいいよ。KBC の方を 1 ページあたり 2 ページとか 4 ページ入れちゃっていいので。いいよね。(植上) →これについてはそんなに負担に考えなくていいと思う。(飯塚) →わかった。(丹田) →だから今まで書いてきたことに、ペライチで始めに実証講座の流れみたいなことを、このポイントだけ見れば分かりますよねというところを表紙に作ってくれれば、あとは資料で入れてくれればいいと思う。(植上) →わかりました。(丹田) →ではこちらの方で、実証講座の実施報告書についての検討は終了したいと思う。 ○追加報告書について ・まだこれからまとめているところなので、今日は特に報告はない。(小田) →そうだよね。こちらについては、第 2 回か第 3 回の委員会で、すでに報告したものを、ベースに小田さんにまとめていただくことになっている。(植上) →それと文字起こしの資料、一つの範囲でまとめて。(小田) →そう。大体それって何ページくらいになる？(植上) →調査結果に要約した報告書自体は 7、8 ページだと思う。文字起こしの資料を全部となると膨大な枚数になると思う。(小田) →文字起こしは出してもいい？(植上) →文字起こし、最終的にお話を聞こうかなと思った。最終的に紙にするかしないか。今回紙にするよりもそれぞれのものをホームページ上に載せておけばいいかなと思っている。テープ起こしのデータについては、相当手を入れないと、公開データにしづらい。えーっとみたいなのがいっぱい出てしまうと。だから出さなくていいと思う。(飯塚) →文字起こしのデータはこのメンバーで共有しておくということだよ。(植上) →データを共有していただきたいと思う。(飯塚) ○教材開発について 2 章が大分変わるという形になると思う。おそらく 2 章は、意義。対象とする専門学校教員の仕事かどのような意義があるのか。業務の概要をある程度抑えていく。そのようなものが、後々 3 章 4 章で来るアイデンティティの前段に位置づけて、前段というか一部に対象となる職業的アイデンティティの話を 2 章でしていくということだよ。
--	---

	それを自分のところに織り込んでいくというのは3章、4章の話になるという理解でいいよね。(植上) →はい。(丹田) →ありがとうございます。小田さん、何か3章、もしくは4章のところで何かある？(植上) →ありがとうございます。キャリアオーナーシップを注目することで、佐藤さんにご説明いただいて 私も非常に納得している。この話を最初4章に入れていたが、佐藤さんからも言われたとおり、まず1章とか2章あたりで少し話した上で、3章で初期キャリアとは何だろうかに繋がられると、分かりやすいと今感じた。もう一つは3章のところで、研修の時は初期キャリアの困難をどのように克服していくのか研修では一緒にしていたが、本来4章で書いてもらっていた内容だったので、統合の仕方について詰めていければと思う。(小田) →そこ相談になると思う。入れるのであれば、1章の4節。植上先生が自分らしい専門学校教員になっていくというところは、まさにそのオーナーシップの話とかがある。そこで大きな概念を説明しておいて、3章で回収する方法もあれば。一方で、3章の話でも述べておきながら具体的なその人材像の話と能力育成について文脈の中で触れるのは、他の選択として、あり得るかなと思う。企業文脈とかの話だとむしろ多いくらいなので、今回は研修だからどちらでもいいと思うが、その辺は次年度詰めればいいかなと思う。(佐藤) →1章に入れ込んでも全然いいと思う。3章に入れ込んでも別に変わらないと思う。結局3章でキャリアの多様性という話がある。ここをマイナスのイメージだけではなく、プラスで捉えていく。つまり多様なキャリアを歩んできた先生方がある意味主体的にそこで選んでいる部分がある。普通の小中高の先生と違って、皆さんもこのような形で実はキャリアオーナーシップをされてきた。そこは専門学校の先生たちの強みという話はあると思う。もちろん1章でやった上で、3章でやって全然構わない。そのような形で専門学校の先生たちのある種の入職前のキャリアを位置づけていくって話が3章のポイントにもなってくると思う。そのような形で話が通じていくといいと思う。今、佐藤さんからいただいているところだと4章で学びをデザインするというのがある。(植上) →そう。それが今、2時間目に吸収される感じになっていると思う。(佐藤) →学びをデザインするは分けてやった方がいい気がする。(植上) →そう。だから1個気になっているのは、岡村先生が初期キャリアの先生に話すときにオーナーシップの捉えられ方が間違っ
--	--

ると気になるって話がある。やっぱりみんながそれぞれの前職の経験とかも生かして作っていくのがいいが、一方その多様な役割を担う中で作っていく部分もある。その話は入れてほしいと言われたので、テキストのベンズの話の 19 ページ目のところに入れているのはそういうところがある。それはそれでキャリアの話をした方がいいパートはあるなと思っている。部分部分が抜けていくと浮いて落ちるなって気がしているので、どの辺に回収するのか考えていきたいと思っている。

(佐藤)

→筋は大分できてきたと思うので、その入れ込み方というところを意識していこう。ここで出てくる学びを提供してくれる云々観念というところも、言い方次第で今佐藤さんがおっしゃってくれた初期キャリアの先生方にとってどのような研修や資質能力が必要とされているのかという話を提案していくということがすごく大事なかなと思う。ここをもう少し膨らましてもいいのかなと思っている。(植上)

→今見たらスライドがPDF化したときにおかしくなっているので修正はしたと思っている(佐藤)

→そのような形でやっていければと思う。今私の方でもこんなことも含めて別途論文とかみたいなことも考えている。この方向でいくとうまくいくという感覚はある。3月4月に研究者グループで前もって議論できていくと来年度のスタートがしやすいかなと思っているのでお願いします。少し私の方でいろいろ話をしてしまいましたが、ぜひ松田先生、飯塚さんからもご指摘もしくはご質問いただければと思いますけど、まず松田先生いかがでしょうか。(植上)

〈意見交換〉

・初期キャリアをどのような形でされるか。最終的に多様な教員の形がある。その中でこのような将来が未来からの反射ということで初期的にどのようなことが必要だよというお話。これ間違っていないよね。その時に教えるという仕事の上だけで範囲がいろいろある。何を言いたいのかというと将来管理職的な教えることから外れる仕事というキャリアもある。その辺もあるので、生涯一教員という教えることだけ授業をやるという教員のキャリアもある。その中で、ここで示される初期キャリアはどこをされているのか。全部総括的に初期キャリアの資質をそこでされるのか。ある程度絞ってされるのか。(松田)

→今の説明に対しては2個あって、1つは今回資質能力について言及するのは初期キャリア。ただし今は先生がおっしゃったように、その先でどのような仕事があるのかというときに、今度は見通しの部分。先生の専門家として残っていくという方法もあれば、業界に戻っていく方法もあるという話はする。その話は見通しの話。そこであえて研

修の内容を入れているのは役割が変わっていくと学ぶべき内容も変わっていくということを初期の段階から見通しは持っていた方がいいという意味で触れようと思っている。(佐藤)

→そこがどれくらい範囲か。(松田)

管理職の話まで資質能力のレベルで話すと多くなるのでそこは触れない。(佐藤)

→そうだね。その範囲がどうかなと思った。それから、自分らしい専門教員になっていくとはどのようなものがあるのか。これの自分らしい専門学院になっていくという中身はどのようなことを織り込まれるのかなと思った。自分らしい専門学院教員って逆に言うと、僕から何十年携わって教員と一緒にずっとやってきて自分らしい専門学院教員って何だろうなと思う。それをどのようにお話しされるのかなと思った。(松田)

→1章の4節のところで、言いたいことは専門学校の世界にまず馴染みましようって話を、1章でするつもり。馴染んだ後の先に、自分らしい専門学校教員という姿が見えてくるはず。(植上)

→具体的に示されるのではなく、自分らしい専門教員が見えてくるという結論にされる。(松田)

→はい。まず慣れていかないとそもそも専門学校教員という世界が分からない。その専門学校教員というところの職業世界に馴染んでいくということを通じながら、その中で自分というものがどのような強み弱みがあるのか。そしてまたその中でどのようなうに学んでいくことを通じて自分のニーズが分かっていくのかという話をしていきたいと思う。そのためにはそもそも専門学校教員とはどういう仕事なのかって知らないといけない。また困難を乗り越えていく初めの段階のところも乗り越えていかないとけないという話が2章3章という形でつながっていけると思う。だから、別にキャリアオーナーシップという言葉に頼らなくてもいいかな。だから1章で入れていない。(植上)

→少し私からも補足すると、自分らしい教員というと研修でやった内容でいうと専門学校を経験しているかどうかによっても全然イメージが違う。社会人経験がベテランの先生とストレートインをしている先生でも全然経歴が違う。これまで従事した業界との関わり方も違う。教育に関する教え方の、要するに講師みたいなことをしていたかでも違う。先生としてスタートすることについての背景としても違う。だからそのようなものが違いとしてはあるが、自分らしい先生になっていく上で、何かがないからネガティブというわけではなく、それをそのようにうまく生かしていくのが重要という話をしている。例えば研修に来た先生でも卒業してすぐ先生になった先生とかもい

	た。一方で一緒に話している先生は 40 代ぐらいの先生がいた。だが、それはその子なりの先生を作っていけばいいと思っている。その子の強みがあると思う。そのような意味で研修の中で自分の中で具体化していくという活動自体は盛り込まれている。(佐藤) →僕の解釈としては、このようなことをやったら自分らしい専門学校教員になるみたいな答えがここで言われると思った。植上先生も少しに言われましたけど、馴染んでいくことが自分らしい専門学教員になれますよみたいなのがあったと勝手に思っていた。少し僕の捉え方が、この文言だけ見たらこのようなことをすれば自分らしいなれるということと言われると思った。(松田) →なるほど。4 節のタイトルは工夫する。(植上) →今佐藤さん、植上先生がおっしゃったようなことでだんだん理解はしたが、この文だけを見るとそう思った。(松田) →演習の流れから言うと全然違和感なかったと思う。このようなことに馴染んでいかないといけないという話とそこの中でこれまでどのような経験をしてきたか。当然影響してくるわけだから両方の話が研修には入っていた。 (佐藤) →それをやることによって自分らしい専門学校教員になれますよということ。それが自分らしい専門学校教員ということが理解できればいい。僕は、受けてないのでお二人がおっしゃったようなことで自分らしい専門教育はそういうことなのかと理解できればいいなと思った。僕が何十年も出会った先生方は、そこまで理解ができるかなと思った。(松田) →もちろん研修だけでみんながバチツとなればそれに越したことはない。(佐藤) →書き方によっては、自分らしい専門学校になることが大事なのだという理解も必要になる。あと、第二章の専門学校教員とはどのような仕事なのか。これだけ捉えると仕事内容を思う。だが、この 2 節とか 3 節になると、専門学校の教員とはどのような教員かということ。どのような仕事なのかというのは、専門学校の教員と確か間違っていないが、捉え方によっては仕事のことに行きがちな言葉だと思った。この 2 節 3 節と専門学校の教員とはどのような教員なのかは、小学校中学校高校大学の先生とは違いを言いたい。どのような仕事なのかというのは分かるが、捉え方によっては仕事のことを思ってしまうような気がする。(松田) →今さっき先生がおっしゃった他の教育課程の方とは違うという話もちろん。先日大井先生からご意見いただいた。授業だけではないというところ。それだけではなくていろんな方に対して、社会人入学
--	--

	生とかに対しても教育しないといけないし授業以外のいろんな業務もある。その仕事内容に関してもこの辺りのところで触れられるかなと考えている。なので、先生おっしゃったとおり少し具体的な業務としてどのようなことがあるのかみたいな話もこのところに入り込んでくるかなと思っている。(丹田) →なるほど。教員とはという定義があればと思った。どちらかと言うと2節、3節のことがメインと僕は捉えた。そうすると仕事というよりも教員とはという意味合いの方が強いのではと思ったので、この言葉がいきなり第二章入ると勘違いする人が出てくるかなと。仕事とはより違う言葉の方がまだ適正と思った。(松田) →おっしゃる通り。2章が2つ重なっているのは事実。ここを検討しよう。2章についてまだ議論はしきれていない。前回のKBCのところで成底先生からもあったように、アイデンティティが大事だという話がすごく強調されていた。この2章の2節、3節はどっちかというところなので、これを強調しておいた方がいいだろうという話。ただ、さっきおっしゃるように、1節はアイデンティティというよりも少し業務の話になる。業務とアイデンティティは若干ずれてくるので、ここの区別は必要。ここをしっかりとっていくと3章は両方扱う。(植上) →イメージとしては1章2章で役割とか機能とかアイデンティティの話をして3章はその中でも初期キャリアでそれを発揮するときのような大変なことがあるのかという話。それをするためにはどのような資質能力が必要なのか。(佐藤) →ストーリーになっている。(松田) →厳密に考えると2章は2つに分けた方が良い。アイデンティティの話と業務の話。もう少し言うと業務に必要な知識・技能・価値観の話とアイデンティティの話あるといい。3章は両方扱ってギャップがあるって話をしている。そこでキャリアオーナーシップをしていかなきゃいけないという流れになっていく。厳密に言うとも2章に関しては2つに分けた方がいいはず。(植上) →仕事の話も本当は2章のところとかに入っていた方がいいと思う。(佐藤) →そう。(植上) →最初にアイデンティティがあって、その後に仕事があると分かりやすいと思う。いきなり仕事からってくると。(松田) →大きい話をして実際の業務はどうなのかみたいな話でいいし、今の丹田さんの分け方がそうだね。(植上) →そう。(丹田)
--	---

	→具体的な業務はどのようなものがあるのか。その業務をもう少し意味づけていくのか。どちらでもいい良いが。ここはどちらの方が読みやすいのか。ただ、アイデンティティの方がいいのかもしれない。わかんないけど。(植上) →そっちの方がウェイト的には多めで良さそうな感じ。(佐藤) アイデンティティの方がね。2章はちょっと2つに分けた方が。既存の3章が勝って入っていきやすいし、書きやすくなるかな。(植上) →3章のところにも仕事の中身で、このような仕事をする中でこのような困難って話が当然出てくる。3章でもそこは触れる。(佐藤) →アイデンティティの話もしている。アイデンティティのギャップの話みたいなのところもある。 そうやってキャリアオーナーシップって話に行くと、通るかなという気がしている。ありがとうございます。飯塚さんいかがでしょうか。だいふ時間が迫ってきたので。 (植上) →まず成底さんの話は、アイデンティティとオーナーシップってどちらが大なりかっていうのは、結構、場面にて変わってくる感じだと思う、僕は、皆様方とは少し違うところを考えている。というのは、概論が、時代によって変わってくるものだから、とにかく1回ストーリーやフレームを 作ることが重要だと思う。そもそも岡村さんと話をしていたときにこのキャリアオーナーシップは、 植上君から出ているのは辞めないようにしたいと学生、教員が。そうするとKPIは何になるかっていうとこの授業を受けたことによって辞めないかやりいと思うか。一回やめた後にもう一回戻りたいと思うかがKPIになる。これはどんどんフレキシブルに変わっていくので、とにかく一回形を作るということが重要。そこから先は継続的にこれをしていくことによって時代に合った形に変化していくという機能をどう持たせるのか。これのことをプログラム開発の戦略的開発と思っている。そうなった時に今の状態ってこのプログラムが出来上がった後でどのように継続性担保します?という話になる。このことを知っている人間が、植上さんとか皆さんも学校にお呼びして、このプログラムやってよというやり方が一つ。もう一つこの前市街でうちの研修があったので、その研修終わりに11階に行った。その時に原田局長がいたので新任教育委員会長にこれなんかダメなの?という話をして、非常に良い感じということで見に来いかという話をした。来年、原田君とかにも見てもらって何か要するに市街地帯で継続的に往ける可能性はないか探ってくれと。彼が困っているのは予算のことだけなので、やり方はあるかなと思っている。植上君を研修中央委員にし
--	---

ちやうと、自分の研修がいいとその場で言えなくなるという話を
して、両方とももう少し戦略的にやったほうがいいと思う。だから、4パ
チ研修みたいなものっていうのを使って、要するに県の尖閣であると
かそのようなものを使って8時間の研修をプログラムの中に掘り込む
ことを目標とするならば、そもそも8時間の研修というので作ってい
かないと、もしくは16時間とか4時間とかの研修で作っていかないと
公の場でできない。かつ今度は個別の学校に呼んでくださいという
話になった時に、まず仕事になれましょうというのが1章に書かれて
いますとペルソナ設定は1年目と2年目。3年目の人たちからの意見
だと切っちゃうけど1年目と2年目のターゲット、あなたは慣れた
か。そこから先に自分たちの強みであるとか弱みであるとかって明確
になったか。やりがいを感じたか、だから今もいるんだよねっていう
ストーリー。でも個別の学校で、例えば麻生さんのような大きい学校
であれば、何十人という新人の教員が入るかもしれない。でも、僕ら
の話しているレベルの300人、400人のレベルの学校だと、入っても
3人とか5人。これはね、研修プログラムとしてできない。いいもの
があるけど、どこにも使われないっていう形になってしまう。だから
戦略的にはこれをどこで成熟させていくのかっていう設計をしながら
やっていかないといけないかなと思っている。一番簡単なのは、全
選権の何かの教員認定プログラムみたいなものを作ってもらって、そ
の中の1個のパーツとして入れてもらうというやり方と、4・8研修の
内容は今もう大学の方に偏っている内容だからその中に入れ込んで
この素晴らしい研修自体をリニューアルしていく、変えてしていく。
時代に合ったものに変えていくっていう仕組み。そこを設計しておか
ないと、ただ作っただけになってしまう。無駄にしたいくないと思う。

(飯塚)

→ありがとうございます。おっしゃっていただいたことすごく刺激に
なる。僕もおっしゃる通りだと思う。まずペルソナというところに関
しては本当にその通りだと思う。今回3年目とか4年目の人も来てい
るとどうしてもきつい。1年目2年目ぐらいにもう対象で絞りますよ
って話とかをしないとどうしようもない。いろんな文句ができたらし
ょうがないので、やっぱり絞りたい。ただ、飯塚さんがご指摘いただ
いたように、やっぱり一つの学校とか一つの法人でこれやるのは、正
直無理、無茶だなんて思いますので、TBC財団が一番の目的かな。も
ちろん全選県さんと一緒にやればいいと思うが

TBC財団に何とかして入れ込んでいくというところをしていきたいな
と思う。前回僕も原田さんと佐久間さんと話したら関心を持ってくれ
ていましたし、東京のやつ作ったやつはダメだという話は原田さんと

	かも思ってくれたので、東京の教科書みたいなものもあるが。来年はとにかく 8 時間。(植上) →4、8 だから、だいたい 4 の倍数で設定されていて。でも 8 っていうのが、一個のかっちりした形。(飯塚) →8 時間くらいの設計で、やれるといい。(植上) →8 ぐらいになるよね。(佐藤) →8 でやれると、楽で。(植上) →逆に 8 ぐらいかけてやった方がいいと。(佐藤) →その時間を限定して、その時間で最高のパフォーマンスを出す研修というのを考えていくと、考え方として逆の話になってしまうかもしれないけど。(飯塚) →来年、研修としては 8 時間。その 8 時間の研修に合うという形での教科書作りというところで、他の新人研修の実行項目もあるので。ただ今回のテキストに関するところはないので、このようなことを入れ込めますよみたいな話をしていければいいかなと思っている。この辺も先生方のご意見とかをいただきながら 4 月に中央委員会があるので、そこで議題にできないかどうかみたいな話もできればなと思っている。(植上) →なんか今の話で私は考えとかないといけないなと思ったのは、時間は結構はまる気がするがする。 次の 4 章とか考えると。ただ、IT の子と公務員の子が一緒になってという話があったが、その意義は、自分の学校だと受け入れられないというか。そんな数はいないが、みんなが集まった時に逆に、他の学校の先生も割りかし共通している部分や違う部分を知れることが。やはり、お会いしてやった時も、同じ学校ですら知らないということを考えることに意味あるとは思っている。その時にどのような組み合わせだったらうまくいくのかを考えながら来年その情報を取っておかないと、我々今同じ学校の先生でしかやっていないから。(佐藤) →それこそ全選県をターゲットにしてグループ法人。一回だから KPC、麻生さん、新潟とかではない単独の学校になると全然ことが違う話になってくと思う。(飯塚) →そのキャリア教育財団でやっていくと、そのような人たちの集まりになりってことだね。(佐藤) →基本的に 1 年生 2 年生っていうのが聞いやすくなる。ある程度の束作ってやっていかないといけないと思う。これを 5 人でできますかという話になると結構寂しい感じになる。ある程度のボリュームを担保しながらやっていかないといけない。例えばビデオの教材で事前学習をしておく。一学校レベルでもできないので複数の学校が寄り添って
--	---

(様式)

	人を集めて教育を作っていきましょうという体制整備ができている県からやっていくのがいいと思う。(飯塚) ○事務局連絡(飯塚) ・来年度は、テキストを完成させる。 ・ビデオの作成はしない。 ・実証講座は2箇所
配布資料	

以上